

# 平成25年度「經濟史入門」

## 1. 經濟

# なぜ市場か？

- (1) 現代においてアクチュアリティをもつ経済に関する言説は市場経済についての言説でしかありえないこと。
- (2) 市場が自生的社会のアナロジーとして有効と考えられること。
- (3) この講義の後半の対象であるイスラム世界の経済が現実には市場経済であること。

# 広義の経済と狭義の経済

「人間は本性上社会的動物である」

- ①人間は他の動物と同じく、生命体である以上、自らの生存と子孫の維持のために生活の糧を得なければならない。
- ②肉体的にきわめて弱い存在でしかない人間は、他の動物以上に、生存と種の保存のための生活の糧をえるのに、集団を組織してでしかなしえない。

⇒人間はその生命ならびに子孫の維持のため、外界の物質的世界に対して、「**集団でもって**」「**働きかけ**」、生活の糧を得なければならない。

**労働**: 人間の外界の物質的世界への働きかけ

**分業・協業体系**: 集団における労働と労働の結びつき

経済とは

**広義の経済**: 人びとがある分業・協業体系のもとで、労働を通して、生活の糧を体系的かつ組織的に得るプロセス

**狭義の経済**: このプロセスが市場を介してなされる経済＝市場経済

# 労働とエネルギー革命

- 七度にわたるエネルギー革命  
(アンドレ・ヴァラニャック『エネルギーの征服—成熟と喪失の文明史』)
- ①火の獲得と利用(炉=家の出現)
- ②農業と牧畜(新石器時代)
- ③火の工業的利用(冶金術)および畜力、風力、水力などの利用(前3000年紀—前1世紀)
- ④火薬(14—16世紀)
- ⑤石炭・蒸気(16—19世紀)
- ⑥電気・石油(19世紀—)
- ⑦原子力・コンピューターなど(第二次世界大戦後)である。

# 「社会に埋め込まれた経済」

カール・ポランニー(1886-1964)

## 近代経済学批判

「形式的な」経済学 : 社会から独立した市場経済を価格メカニズムとして理論化し、その展開のなかで経済社会を分析する経済学 (**狭義の経済**)

「実体的な」経済学 : 「社会に埋め込まれた経済」をも含む、人間と環境との間の制度化された相互作用によって生活の糧を得るプロセスを分析する経済学 (**広義の経済**)

## 「経済統合」の三類型

**互酬 (reciprocity)** : 社会的に関係づけられた、対称的で双務的な、ものとサービスの移動

**再分配 (redistribution)** : 中心に向かい、中心から再び出る、ものとサービスの移動

**交換 (exchange)** : 市場での匿名かつ自発的な、ものとサービスの移動